

東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会記録

平成30年10月18日(木)午前9時58分～午前11時15分(9階908会議室)

○出席委員(10名)

委員長	高木 克尚	副委員長	尾形 武
委員	沢井 和宏	委員	二階堂 武文
委員	鈴木 正実	委員	根本 雅昭
委員	小松 良行	委員	村山 国子
委員	小野 京子	委員	渡辺 敏彦

○欠席委員(1名)

委員 山岸 清

○議題

- 1 意見交換会について
- 2 その他

午前9時58分 開 議

(高木克尚委員長) おはようございます。ただいまから東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会を開会いたします。

本日、山岸委員より欠席の連絡をいただいておりますので、ご報告いたします。

議題は、お手元に配付の印刷物のとおりでございます。

意見交換会についてを議題といたします。

本日は、前回継続協議といたしましたグループ別のテーマについて協議をさせていただきたいと思っております。前回皆さんからたくさんいただいたご意見をもとに、正副委員長手元で案を調製いたしました。調製にあたって正副委員長、事務局含めてさまざまなシミュレーションをやってみたのですが、なかなかこれだという方法が見出せなかったものですから、きょうは皆様に2つ、2種類のテーマについてご議論をいただきたいと、こう思ってお提示申し上げました。

お手元にグループ別テーマ案がございます。1つは、タイトルが参加しよう、オリンピック。これは、オリンピックを本市で開催されるにあたって、盛り上げるために中高生どんな思いで、どんな関心があるのかということの中高生の皆さんからお聞きをしたい、楽しみ方あるいは楽しむためにはどうしたらいいかと、こういったことをざっくりお聞きするテーマとすればこういうタイトルなのか。

2つ目のなくそう、心のバリア 心のバリアフリーというタイトル、テーマですが、要は障害のあ

る方とどういうふうにかかわっていくべきなのか、あるいはかかわり方についての考え方を中高生の皆さんに具体例をこちらから提示をして、意見をお尋ねするという方法。

といいますのも、実は日曜日、福島市で行われましたふくしま健康マラソン、これは毎年開催されているのですが、この中で全盲のランナーの方が伴走者と一緒にこの健康マラソンに参加をし、6位で入賞したのです。本人も伴走者も関係者も大変喜んでいたのですが、競技が終わって、表彰式の段階になりましたら、6位ではなく障害者の部第1位というふうに表彰されてしまった事例がありました。本人は、とにかく練習も重ねて重ねて、完走して、健常者にまぎって総合6位という記録に非常に喜んでいたのですが、表彰式で大変ショックを受けてしまったと。これは決して実行委員会が悪いとかなんとかではなくて、もともとエントリーの仕方に種類があったのかどうか、あるいはエントリーされた方が障害のある方で、急遽そういう部門を設けたのか、そこは確認はとれていないですが、参加した本人は、県の職員なのですから、女性の方です。非常にショックを受けて、関係者もショックを受けたと。同じ表彰状をもらうなら障害者の部1位よりは総合6位が欲しかった。そういう事例が生じました。

これは去年の話なのですが、伊達市でも似たような伊達ももの里マラソン大会というのをやって、昨年の出来事なのですが、障害者の方が後続から走ってきたランナーに邪魔だと蹴られたと、こういう事件も発生して、市長みずから謝罪をするに至ったという事例もございました。

そんなあってはならない、あってはほしくない事例が生じてしまったことから、2つ目のテーマ、なくそう、心のバリア 心のバリアフリーということで、具体的な事例を参考に中高生の皆さんに意見を聞くという方法。

最初の参加しよう、オリンピックのように何の前提もなく純粋に中高生の話を聞くという方法と、事例を紹介して、それに意見をいただくという、どちらの方法がいいのかということで、事務局、正副委員長としてシミュレーション上非常に悩みまして、そこをきょう今申し上げましたように2つの案の違いがございます。

繰り返しになりますが、最初の参加しよう、オリンピックというテーマについては、参加する中高生が場の雰囲気になれてもらうために、緊張をほぐしていただくために気軽に中高生の率直なアイデア、意見を出しやすいテーマとしました。そのため具体的な提言に結びつくようなまとめができるかどうかというのが非常に不透明なところがあります。意見を聞き放しでまとめにいかないというおそれもあります。

2つ目のなくそう、心のバリア 心のバリアフリーというのは、今私が申し上げましたように、健常者と障害者が分け隔てなくスポーツなどに参加するいわゆる共生社会のために、段差解消とか、施設整備の面でのバリアフリーだけではなくて、心のバリアフリーも重要ではないかというふうに考えております。そういう面が福島市において不足していないかどうか、現実的な課題として中高生の考えを聞き出してはどうかというテーマでございます。

つまり最初の①は純粋に中高生の本音を聞き出すテーマで、②は明確な課題について参加者はどう考えるのかという意見を出してもらって、我々大人との考え方の違いがあるかなど議論をして、その場でまとめを導いていく、逆にまとめがしやすいのかなど、こんな思いがあります。

これまでグループ別テーマについては、参加する中高生が場の雰囲気になれていただくために気軽なテーマというふうにお諮りをしておりましたが、②のように具体的な事例をもとに、我々はこう思うのですが、あなた方はどう思いますかという議論の方法も導入してはどうかというふうに考えました。そこで、今回は最初に行うワークショップを①のようなテーマで行うのがよいのか、②のような具体的な話をもとにテーマとしたほうがいいのか、改めて考えたいと思っております。

そのために、後方にご準備をさせていただきましたが、グループ別テーマの案について、実際にワークショップ形式で1がいいのか、2がいいのかという検討を行いたいと思います。お配りをしていました班分けについて、A班、B班で記載されているテーマについて、実際にワークショップ形式をとって、どちらがよいか検討していただければと思います。大変恐縮ですが、一石二鳥を図っております。

(村山国子委員) その前に、②の題だったのですけれども、なくそう、バリアフリーとつながっていると、なくそう、心のバリアフリーとどっちにもかかるような感じに受けるのです。だから……

(高木克尚委員長) そこもぜひ後ほど調整していただければありがたいのですが。

(小松良行委員) ①か②に絞るということではないですよ。

(高木克尚委員長) やり方を大ざっぱなテーマでやるのか、事例を絞ってやるのか、どちらかを選びたいのですが、そのためにテーマをこの2つに。テーマのタイトルもテーマの趣旨ももし皆さんからこっちのほうが良いということあればそれはそれで調整を図っていただきたい。きょうはシミュレーションをするためにあえてこのテーマと事例を紹介させていただきましたので、必ずしもどちらかのテーマということではないです。まず、方法を選択していただきたい。何でも良いから、自由にどうぞという中高生の意見の聞き方にするのか、障害者の関係の事例を挙げて、どう思いますかという聞き方がいいのか、どちらかをきょう皆さんで選択していただければと思います。ただ、その方法を選択した上で、このテーマでやりますということではないです。このテーマに沿ってやってもいいし、まるっきり別なテーマでやっていただいてもということで、きょうはA班、B班に分かれて議論いただければと。本当に正副委員長悩みました。せっかく行うのに何となくまとめもない形で終了をしたくないということで、きょう申しわけないのですが、2つに分かれていただいて、どちらのテーマの振り方がいいのか検討していただければと思っております。

そこで、3月に実際本番の際には司会進行あるいは調整役、こういったファシリテーターの設置なんかも考えなければなりません。それから、記録係とか必ず必要となりますが、そのような点も頭に入れていただいて今回のワークショップを行っていただければと思っております。大変勝手に申しわけございませんが、お手元にございますようにA班、B班の振り分けをさせていただきました。急遽、

山岸委員が欠席となりましたので、村山委員、B班ではなくてA班に回ってください。

本日のA班、B班のそれぞれ座長、これを委員長から指名したいと思うのですが、よろしいですか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) では、A班の座長をぜひ鈴木委員にやっていただきたい。B班の座長をぜひ二階堂委員にやっていただきたい。おおむね20分程度で。課題の深掘りよりは、どちらの方法が本番のときに高校生から意見を聞いてまとめやすいかということを中心にきょうは行っていただきたい。もっと別な方法あるのではないということであれば、それはそれで後ほど報告いただきたい。報告は全員からいただきます。記録とか何かの係がなくても結構でございますので、とりあえず座長はお二方をお願いして、20分程度でご検討いただければと思うのですが。

それでは、班ごとに分かれてワークショップを開始していただきます。

【この間グループ討議】

(高木克尚委員長) それでは、大変ありがとうございました。やってみると、こういう形式ではなくて小ぢんまりした会議もいいなというふうに思いました。それで、大枠をまずA班、B班それぞれの座長さんからお話しいただいて、あと各委員からそれぞれ交換をいただくと、こんな形にしたいと思います。まず、A班からひとつよろしくをお願いします。

(鈴木正実委員) 今までの中で話をさせていただいた、自由な討議ということで話を進めていく。ただし、自由な討議の中で考えられること、それは時間軸、時系列的に話をしていくのが一番高校生にとってもわかりやすいのではないだろうか。要するにこの意見交換会が終わった後からオリンピックまで、あるいはオリンピックの期間中に私たちは一体何ができるのだろうかという、そういう議論を深めて、カテゴリー分けをしながら、それについての意見をまとめ上げていく。自分たちとすれば大会も盛り上げなくてはならないし、大会前までのこととしてもオリンピックを盛り上げなくてはならないですよという、そういう提言に結びつくような形で議論をする。もう一つは、大会が終わった後、今度自分たちが大人になっていく中で、今回のオリンピックを経験して、日本という国あるいは福島、あるいは世界に、一体自分たちに何ができるのかということ掘り下げていっていただきながら、自分たちがこれから将来にわたってレガシーという部分にどのようにかかわっていくかというものを意見を出していただきながら、それをまとめ上げていくというような大ざっぱな流れで、こういうやり方ではいかがかということでA班のほうは話をさせていただきました。

(高木克尚委員長) ただいまの報告を整理すると、当初グループ別テーマを先にやって、あと後半共通テーマということで順番を考えておったのですが、A班とすれば先に共通テーマを議論していただいて、それを受けてオリンピック後に何を残すかという班ごとに自由にテーマを見つけて提言をしていただくと、こういう形ですよ。順番が変わるということをまず前提にA班はまとまったということですね。

(鈴木正実委員) ええ。

(高木克尚委員長) B班、お願いします。

(二階堂武文委員) これ①というのが参加しよう、オリンピックで、②というのがなくそう、心のバリア 心のバリアフリーなのですが、上のほうがまず話ししやすい、高校生たちが参加しやすい雰囲気づくりというところから始まったときに、オリンピックの楽しみ方というか、オリンピックに対する期待感であり、楽しみ方なんかをそれぞれ皆さん持っていらっしゃるものをちょっとまずは話をさせていただきながら、実はこれこういった形で話をまとめていくというか、収束させるみたいな矢印なのですが、個々人が、ここに方法論というか、進行テクニックみたいなものがありますけれども、とにかくみんな口を軽くして自由に物を言える雰囲気をつくりながら、オリンピックに対する話をだんだんしていただきながら……ごめんなさい。言い方間違えた。

私どもとしてみれば、1と2というのはつながっているものだというふうに受けとめていて、それは話の司会進行するテクニックとして、まず話しやすい雰囲気でもオリンピックに対する話をしてもらいながら、中には具体的な事例も取りまぜながら話をいかに深めていけるかということなのかなということ、それをどういうふうに持っていかかということ、やっぱりまずオリンピックに対する期待感、楽しみ方からだんだん話を進めていっていただきながら、復興五輪というのが共通テーマとして最初というお話がありましたが、多分みんなが出だしのところで話しやすくするには、意外とオリンピックを楽しむところから入って行って復興五輪、復興五輪というのは実はその精神というか、海外からもいろいろお世話になりましたが、オリンピック精神と相通ずるような、ここに人類愛という大きな言葉がありますが、この辺が意外と復興五輪の皆さんの思いとかいう部分とオリンピック精神というものが相通ずるところがあるよねみたいな形で、自分たちもそのご恩返しみたいな形でできることはどんなことがあるのかなみたいな形の収束の仕方というか、まとめ方みたいな形で持っていくとどうなのかなみたいなまとめ方になりました。最終的には根本さんがまとめてくれるそうですから、根本さんにまとめていただきたいと思います。よろしくお願いします。

(高木克尚委員長) A班、B班共通のような、相反するような。

その他の委員の皆さんから補足、補完があればご発言いただきたいのですが。

(根本雅昭委員) B班なのですけれども、①、②のグループ別テーマで、初めは先ほど二階堂委員おっしゃったように参加しようといいますが、盛り上げようのような形で広い間口で自由な中高生の意見を聞いて、その話を聞いているうちに②の心のバリアフリーですとか、復興五輪につながるようなものが話の中で出てくると思うのです。後半は、先ほど鈴木さんおっしゃったように、落としどころといいますが、最後のまとめとしては、①から始まって、②の話をすることによって、別に復興五輪について話さなくても、この①、②を話すことによって復興五輪につながると思うのですけれども、落としどころはやはりオリンピック前に中高生が復興五輪に向けて何ができるのか、期間中何ができるのか、終了後どのように復興五輪につなげる行動がとれるのか、その3つに分けたまとめができればいいのかなというふうに思います。

【「大体同じですね」と呼ぶ者あり】

(根本雅昭委員) 大体同じです。

(村山国子委員) 今根本さんが言ったのを聞くと、やっぱりA班と同じなのかなというふうに思いました。時系列。そうすると子供たちというか、中高生の頭の中も整理しやすいのかなと。オリンピックを中心に、その前と中心とその後でと考えていくと、より意見を出しやすいのかなというふうに思いました。

(高木克尚委員長) ほかに補足説明ございませんか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) きょう本当に複雑な議論をお願いしてしまったなという思いはあります。テーマの順番と手法の問題と両方一緒にお諮りしているので、非常に皆さん悩ましかったのかなと思っておわびを申し上げたいのですが、相反するようで、今村山委員、根本委員がおっしゃるように、共通テーマやっぱり先にやって、時系列的に。その後自分たちが何できるのだという中学生、高校生ならではの意見を聞いていくという手法がA班、B班両方に共有しているのかなと思うのですが、どうでしょう。

【「そう思います」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) 当初正副委員長で考えていたアイスブレイクとして先にグループ別テーマをやって、本題の共通テーマに持っていこうという方向ではなく、あくまでも共通テーマを先に自由討議をしていただいて、オリンピック開催までにどうかかわるべきだかということをお話やって、その後開催市として将来に向けて何ができるのかということをお話自由で、テーマを設けずに班ごとに第2部をやっていただくと、こういうような手法に集約されたと思うのですが、ご賛同いただけますか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) そこで、ではまず前回決めました先に行う復興五輪をテーマにすることは、これはよろしいですね。その中で自由討議をしていただくということでもいいですか。

(鈴木正実委員) 復興五輪って、この間も言いましたけれども、大人の言葉なので、例えば福島でやる、あるいは東京でやる東京オリンピックってどういうイメージだ、どういうことなのだろうかという、そういうもうちょっと広げたやり方の中で詰めていくほうがもっと子供たちにとっては具体的な話をしやすいのではないかな。復興五輪というと、何が復興したのだろうかという、そこへ引っ張られるような感じがするので、もっと大ざっぱに五輪というのをつかまえて、それが大会までに自分たちがどうにかかわりができるのか、福島の大会にあなたたちどういふふうにかかわれるのという、そういう振り分けの中から自由討議をしていく。大会を迎えた。大会でどうかかわる。大会が終わった後に、今までそういう形でなし遂げた後、あなたたちが今度将来に向けて何を一体五輪を糧としてやっていけますかという、そういう議論につながっていく。最終的には、今委員長おっしゃったみたいに、復興五輪だから、世界へ感謝を伝えるのだよね、その伝えた感謝を未来永劫私たちは守ってい

くのだよねというふうなところに結びつくような感じが私はするので、できればアバウトな振り出しから始まって、最終的に復興五輪というよりも五輪とは、東京オリンピックとは、復興五輪という、そういういろんなテーマがもうそこに入ってしまった、包含されている、そこからスタートするほうがいいのではないか。余り絞らないで、復興五輪というふうに。

(高木克尚委員長) この前、前回皆さんからご提起いただきましたので、事前に学校サイドにはその趣旨たる世界中からの支援はこういうことを受けて、我々は感謝の気持ちを示さなければならないという事前の資料はお送りをしておいた上で、復興に向けたオリンピックのテーマに入っていくという段取りになりますので、あえてだからテーマ、タイトルをお伝えしなければならないので、復興五輪とは何だではなくてもいいから、ぜひアイデアをいただきたい。趣旨は変更なしでいいですよ。感謝の気持ちをどう示すのですかということを変えなくていいですね。それから派生する今の意見は自由ですけども。

(鈴木正実委員) そうですね。

(高木克尚委員長) タイトル早く決めないと、向こうに伝達をしないといけない。

(鈴木正実委員) 今申し上げましたが、やっぱりオリンピックとは何だというそこがまず一番最初の振り出しのような気がするのです。だから、冠が復興であれ、東京であれどうのこうのといういろんな形になっていくのでしょうかけれども、高校生にとって今回の東京オリンピックというのは何なのだろうかという、そういう整理の仕方が入っていくということであれば、まず東京オリンピックについて考えよう、福島でも開催されるしという、そういうことがまず当面の入り方ではないかなという気がするのですが。

(沢井和宏委員) まず、最初の切り口としては、やっぱりでは自分にとってオリンピックは何だという、自分にとってという自分の感覚、今まで感じているものについて入れればいいなと思うので、例えば共通のテーマというか、最初の滑り出しは自分にとってオリンピックをどう感じているのかという、そういう最初に投げかけのほうがいいかななんて感じました。

(村山国子委員) いいですね。そうすると自分とのかかわりが出てくるので、意見が出てくる。

(沢井和宏委員) そうするとしゃべりやすいかなと。

(小松良行委員) あくまでも復興五輪というのは我々大人の考えで、あくまでもそうした本当に頭出しも頭出し、今回こういうことでオリンピックの誘致で福島にフットボール、野球が来ることになったよとか、あるいはなぜ来ることになったかということ、福島を励ましたい、あるいは福島の元気を発信したいという私どもの願いもあってこうなった経過がありますね。しかしながら、今言ったようにどのように皆さんは参加していくのかという中においては、きょうここにテーマ案として出てきたのは参加するということや心のバリアフリーとかというようなことで、参画する意識としてここにどうかかわっていくのかという部分をフリーディスカッションでいろんな意見を出し合っていたきながら、一旦そこでクールダウンをしてもらって、各テーブルに班分けをする中で、今の中の話から今後

どのように自分たちは将来の福島、未来の福島のために何ができるのかというふうなことのまとめを行っていくというふうに、2部構成というのですか、そのような階段をつくってあげると非常に子供たちも発言しやすくなるし、最終的なまとめがしやすくなっていくのかなと思ったりするのです。

(村山国子委員) A班で今言われたようにまとめやすいというところで、沢井さんのほうからちょっと意見が出されたのがあったので、沢井さんのほうから話してもらったほうがいいのではないですか。

(沢井和宏委員) 私最初はオリンピックについて漠然といろいろな自分の主観を持って話をしてもらって、時系列でいうなら大会までのことをずっと話をしてもらって、ではどうつなげるかというので、2部の部分ではある程度グループのテーマを話し合う中で、いろいろ意見出てきた中でこれはこうだねとカテゴリー分けをして、その中で自分の班のテーマ、まずこれについて話しましょう、次時間があったらこれについて話しましょうとある程度時間来たところで切って、あと全体発表の中でこのグループはではこのテーマについて発表しますというような形にすればまとまっていくのかなんては思ったのですけれども。

(高木克尚委員長) 先ほどA班の中でちょっとお伝えしたのですけれども、きょう後半で皆さんにもう一度お示ししますが、1班我々委員が2名、子供たちが8名、1班10名が大体限度かな。10名が3分しゃべるとそれだけで30分という、時間的な制約も正副委員長としては考慮しなければならなかったもので、4時間も5時間もやるわけにいかないもので、せいぜい1時間半から1時間45分ぐらいが、最後のまとめの報告まで考えると非常に時間的な余裕はない意見交換会になりますので、なるべく淡々と意見がまとまりやすいような方法を選択していかなければならない。そこもちょっと頭に入れていただいて、まとめまで持っていきたいということを想定していただきたい。

(村山国子委員) そのまとめというところで、さっきA班では高校生の提言というのをつくったらどうかみたいなのがちらっと出て、そこが成果だよというところで。それについてはどうでしょうか。

(高木克尚委員長) それを今度どう我々市議会が活用できるかというところまで我々は考えなければならぬので。高校生から提言を受けて、大人の責任としてどこかに出すということなのかどうか、それはわかりませんが。

繰り返しになりますが、概念的には時系列、これから本番までのことを共通テーマにし、オリンピック以降レガシーとしての考え方をグループ別テーマにする、班別テーマにする、これはよろしいですか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) 共通テーマ、当初決定したのが復興五輪というテーマにしましたが、これではちょっとかたい。もう少し食いつきやすいテーマ、タイトルにすると。それは意見が出ませんので、正副委員長でもう一回考えるということによろしいですか。

(小松良行委員) 共通テーマのくくりで、当初はグループ別として考えていた参加しよう、あるいは

なくそう、これをずばっとテーマにしてしまえばいいのではないですか。

(高木克尚委員長) 成蹊学園側に伝えるときは、タイトルだけではどうしようもないので、そのテーマの趣旨を説明してお伝えしなければならないので、中身についてはお任せいただきたいのですが、肝心のタイトルを次回まで、余裕ないな。正確に言うと、共通テーマは復興五輪って何だという、やわらかくしたつもりですが、復興ではなくてということなので。

ただいま事務局と今後のスケジュールを考慮したときに、きょう皆さんに確認いただいた手法と後ほど議論をする班編成の確認、これをまず第1弾で学校サイドにお伝えする必要が生じておりますので、具体的なテーマ、今鈴木委員からあったようなテーマのタイトルの確認は次回以降できますので、もう一度正副委員長にご一任をいただいて、タイトル決めに入っていくと。きょうはあくまでも流れ、手法、これだけを確認したということよろしいですか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) では、ただいま確認いただきました手法、テーマについては次回以降、成蹊高校に打診をしてみたいと思っております。

また、学校側と協議をする上で、学校側の意向もテーマの内容に反映される可能性も当然想定をされますので、その際も正副委員長にご一任をいただいて、皆さんに確認をいただくということにさせていただきます。それでよろしいですね。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(沢井和宏委員) 次回までにああいうワークシートを、今の段階でこっちが意図している話し合いの流れをワークシートとかいうイメージをつくっていただくと、例えばそれを全部高校生に渡すのではなくて、ある程度抜いて、高校生にこんな話し合いの流れで考えていますよみたいなのを渡してあげると、高校生もどうい話し合いをしていけばいいのかというのがイメージできていいのかなと思うのですけれども。

(高木克尚委員長) 詳細の打ち合わせを打診する際にそれは活用したいと思います。

(沢井和宏委員) あと、ここの中でもきょう話し合ったことはみんなそれぞれ微妙にいろんなイメージを持っていると思うので、全体的な進行表ではないけれども、やっぱりワークシートの形である程度出てくれば話しやすいのかななんて思ったものですから。

(高木克尚委員長) 事務局にご苦労いただきますが、チャートを少し考えてみたいと思います。

次に、先ほどから触れておりますが、参加していただく中高生の定員について協議をさせていただきます。

定員については、グループワークを幾つの班に分けて行うのか、各グループに何人の中高生に入ってもらえるのか、この2点を検討しなければなりません。これもさきに若干触れさせていただきましたが、正副委員長としましては、まず各班に委員が2名あるいは3名、これを1班の人数に、全体で5班にしたい。うちの特別委員会は人数に限界がありますので、5班で想定をして、その中に中高生を

8名ずつ参加していただいて、1班10名。子供は、5班ですから、全体で40名必要になりますが、各班8名で計40名、子供は40名、委員が2名入りますので、1班10名程度が限界なのかな。といいますのも、これも触れておりますが、1人3分しゃべっても30分を要してしまうという。この辺が1班人数の限界なのかなと、こう正副委員長は考えたところであります。これ以上ふやすと、時間がかかり過ぎて想定した時間内に終わらない、こう思うのですが、いかがでしょうか。1班10名ということで。最大10名。中学生、高校生の割合についてはこれからです。

（村山国子委員）最大ということは、もうちょっと減る可能性がある。結局今11名でないですか。

（高木克尚委員長）例えば学校サイドがもっと参加させたいということになれば、班をふやすしかない。1班20人なんていったら、とてもではないけれども、無理なので、参加中高生をふやしたいとなれば班をふやすしかない。班をふやすためには、我々委員が1人で対応するのか、あるいは特別に文教の常任委員にお手伝いをいただくとか、そんな別な方法を考えない限り班をふやすということはちょっと不可能かな。減ることは可能性あります。各班6人なんて向こうからオーダーが来る可能性はなきにしもあらず。ただ、ふえても子供たちは8名ということにさせていただきたいのですが、よろしいですか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

（高木克尚委員長）では、班と定員については成蹊高校側に打診をさせていただきたいと思います。

意見交換会についての議論は以上ですが、皆さんから意見交換会について、先ほど沢井委員からはチャートの申し出がありましたが、そのほか皆さんから何か。

【「なし」と呼ぶ者あり】

（高木克尚委員長）では次に、その他ですが、次回委員会の日程をお諮りさせていただきたいと思えます。

正副委員長としまして、次回、11月5日月曜日を想定したいのですが、各行政視察が行われるすき間を縫って、5日月曜日午前10時いかがでしょうか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

（高木克尚委員長）では、11月5日月曜日午前10時とさせていただきます。よろしく願いいたします。

正副委員長から以上となりますが、そのほか皆さんから何かございますか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

（高木克尚委員長）それでは、以上で東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会を終了いたします。ありがとうございました。

午前11時15分 散 会

東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員長

高木 克尚